

## 説教題「枯れた骨よ、主の言葉を聞け」エゼキエル書 37 章1～10節

主任牧師 加藤 誠

**「そこで、主はわたしに言われた。『これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。『枯れた骨よ、主の言葉を聞け』(エゼキエル書 37 章4節)。**

76年前の8月15日の大井町はどのような様子だったのだろうかと品川区の資料を調べていて、昭和20年5月24日の東京城南空襲のことを知りました。戦災でなくなった家族の遺体を焼く煙があちこちで空に向かって昇っていた当時の光景を語る証言を読みました。そして大井町駅前(西口)にあるブロンズ像は、1985年に品川区が非核平和都市品川宣言をした際に建てられた「平和の誓い像」であること。その隣りのランプは「平和の灯」と呼ばれ、広島市平和記念公園にある「平和の灯」と、長崎爆心地公園にある「誓いの火」から分火し、合火して灯されていることを知りました。

これまで8月は、広島や長崎の平和式典で語られる言葉を聞くなどして、平和のことを少しでも考える時にできたらと思ってきたわけですが、足もとの大井町で、広島と長崎の祈りにつながり、核のない平和を願う祈りがささげられて来たことを自分はまったく知らなかったし、知ろうとして来なかったことに、小さくない衝撃を受けました。あの場所にわざわざブロンズ像を建て、広島と長崎から平和の誓いの灯を分けてもらって灯し続けていこうとした。そこには焼け野原になった大井町を経験した人々が、あの戦争の悲惨さと愚かさを決して忘れてはいけないという、なみなみならぬ深い決意を込めてのことであつたらうと想像します。今、大井町の駅前に立派なホテルやビルが建ちならんでいる光景だけに心を捕われるのではなく、焼け野原だった大井町の光景を想像し、そこにささげられてきた先達の人びとの祈りを心に想像していくことの大切さを示されます。

イザヤ書 51 章 1 節にこういう御言葉があります。「わたしに聞け、正しさを求める人／主を尋ね求める人よ。あなたたちが切り出された元の岩／掘り出された岩穴に目を注げ」。簡単に言えば「あなたの信仰の原点、あなたを呼び出した方の恵みを見失うな、目を注ぎ続けよ」ということです。

あの戦争から 76 年目の 8 月 15 日。私たちは新しい礼拝堂を与えられようとしています。新しい器をいただいて、神さまが起こされる新しい出会いに期待がふくらみ、うれしくなります。けれども、このとき忘れてはいけないこと、見失ってはいけないことがある。それは私たちの教会の礼拝の原点であり、私たちを教会として呼び出された方の恵みです。私たちの教会の礼拝の原点。それは何か？

一つは、今からちょうど 90 年前の 1931 年、日本が中国を侵略するために軍隊を進めていった、いわば暗闇に向かう時代に、大井の三又の路傍伝道で、大谷賢二先生が聖書の御言葉を語ることでささげられた礼拝です。建物は何もありません。けれど、そこには聖書の御言葉へのまったき信頼がありました。どんなに立派な礼

拝堂があったとしても、そこに御言葉へのまっつき信頼がないなら、それは礼拝にはならないことを覚えないのです。

もう一つは、今から 76 年前、戦争の焼け野原の中に集められた人びとによって再開された礼拝です。旧礼拝堂の最後の証しに新田恵子さんが立たれて、戦争中、それぞれバラバラに疎開した先でささげられた家庭礼拝の様子を証ししてくださいました。キリスト教会への偏見の強い田舎で、ひそかに見つからぬよう農家の片隅で聖書を読んだり祈りを合わせていたこと。1945 年、やっと戦争は終わったものの、大井第一小学校に落ちた焼夷弾で先生が殉職され、三又から駅にかけては強制疎開といって建物が取り壊され荒廃した風景が広がり、家族も家も、財産も仕事もすべてを失い、人びとは心身ともに疲弊しきって、うつろな表情でさまよっていた時に、迫害と監視を受けながらも各地で細々と信仰の灯を絶やさず守り抜いた人々によって礼拝が再開されたことを語ってくださいました。

今、私たちは目の前には素晴らしい礼拝堂を見ているわけですが、その礼拝堂が礼拝堂にされていくためには、旧礼拝堂もまだ建っていなかった、焼け野原だったこの土地に起こされていった礼拝を決して忘れてはならないと思うのです。すべてを失った焼け野原にたたずみ、神さまの言葉にこそ真実の愛と正義があると信じて、この場所に集った人々によって生まれた礼拝。その私たちの教会の原点を見つめる時、今、76 年前とは別の困難があふれている時代において、私たちが教会として歩む指針を見出だしていくことができるのではないのでしょうか。

預言者エゼキエルが目前にしていたのは、戦災の焼け跡が広がる荒廃した故郷であり、瀕死の重傷を負い、すべてを失って呆然とし、まるで「枯れた骨」のようになっていたイスラエルの人々でした。主なる神がエゼキエルに「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか」と尋ねた時、「主なる神よ、あなたのみがご存知です」と答えるので精一杯でした。内心は「とても無理」という思いの方が圧倒的に大きかったことでしょう。けれども、そのエゼキエルに主なる神は命じられます。「これらの骨に向かって預言せよ。枯れた骨よ、主の言葉を聞け」(37・4)。「霊よ、四方から吹き来たれ。これらの殺された者の上に吹きつけよ」(37・9)。たとえ、かさかさした枯れた骨のような絶望的な状況にあっても、主の言葉を聞くとき、枯れた骨は生かされます。そして、主の霊が注がれるところで、人は生きる者とされるのです。なぜなら、主の吹き入れる霊は、神の恵みに人を立ち帰らせる悔い改め(方向転換)の霊であり、引き裂かれた心を癒し平和で包む霊であり、死んだ者を生き返らせ明日に向かう力を与える霊だからです。

あの戦争で荒廃した大井町に響いたのも主の言葉でした。そして主の御言葉にまっつき信頼を寄せる人々の上に、主の聖霊が四方から吹き注がれる中、キリストの平和を祈り求める大井教会の礼拝が起こされていったことを覚えないのです。